浅野晴風　三月二十四日午後一時ー四
弥生月例会　時半東京杉並区立高円寺会館
送別ー竹内青寿　桜井の駅ー本橋錦颯　俊寛
(上)ー坂入晴峰　同(下)ー原島晴洲　羽衣ー青木
晴城　別れの盃ー大関英子　茨木ー加藤錦陽
修善寺物語ー杉山雅俊　静ー緒方晴舟　設楽
ケ原ー山下晴楓　重衡ー望月啞江　捨児ー浅
野晴風　外に吟詠三

日本琵琶振興会　三月二十五日午後一時
三月親睦研究会　ー八時東京新宿洲鳳会館
彰義隊ー青木晴城　安達ケ原ー井上雅翔　小
松の操(三)ー鈴木鶴謳　井伊大老ー村木桜柳
外に短歌、吟詠各一。六時半から八時まで研
究座談会及鈴木流泉氏による筑前琵琶の「柱
(コマ)のサエのつけ方」の実技指導があり
盛会であった。尚当日は上京中の京都三美会
田中鵬水、矢吹華水両氏の歓迎会をも行った。

三位研修　三月二十五日午後一時東京
同志会例会　三鷹市上連雀公会堂。乃木将
軍ー山崎光水　白虎隊ー藤井雄蔵　戦艦大和
ー坂本錦道　時頼遍歴抄(中)ー大村鼓城　彰義
隊ー大和田鶴道　晃広瀬中佐ー富田勝雄　軍神
岩佐中佐ー生田　堂　外に吟詠三

三ツ山大祭奉賛　四月八日午後三時半姫
筑前琵琶演奏会　路市城南広場舞台、主催
播摩国総社、司会姫路旭会、後援日本旭会外。
天の羽衣ー松岡旭岡指揮、旭操、旭璋、旭好
旭昇外　鶴の舞ー旭吉栄、旭操、八千代、旭
洲、旭濤、旭連、旭好、旭山、旭璋、立方琴
尺八付　ふるさとの心ー八千代外合奏、立方
琴尺八付　五条橋ー旭観、旭総、旭操、旭暢
旭明、旭陽、旭紅、旭楓、旭璋、立方吟詠付
天の羽衣ー旭兜、旭将、旭操、八千代、旭晨
旭陽、旭明、旭璋　綱の館ー旭文、旭明、旭
陽、旭岡、旭濤、旭暢、旭桂、旭山、旭鳳、
吉野懐古ー旭璋、旭昇、旭文、旭操、旭鳳、
旭好、旭桂、立方付　姫路城ー旭操　旭昇、
旭暢、旭濤、旭好、旭登、旭山、旭晨、旭璋
旭桂、立方琴尺八付　秋風故郷の山ー旭風、
旭司、旭岡、旭文、旭暢、旭濤、旭登、旭晨
旭将、旭操、旭璋、立方付　安宅の関ー旭暢
旭桂、旭山、旭岡、旭文、旭操、旭登、旭陽
旭晨、旭璋、旭鳳、姫百合の塔ー旭昇、旭好
旭文、旭操、旭暢、旭桂、旭晨、旭璋、立方
付　月に偲ぶー旭濤、旭昇、旭登、旭好、旭
鳳、旭仙、旭紅、旭玉、旭総、旭桂、立方付
さくらー旭岡、旭楓、旭鳳外大合奏、立方琴
尺八付。外に剣扇風六十名、詩吟百三十名

天津八千代女史活躍　女史は三月二日から二十
九日迄の約一ケ月阪大間新歌舞伎座に於ける
「三波春夫公演」に毎日二回宛共演、又三月
二十九日京都南座の「名流舞踊会」に〃知盛
の幻想〃(立方中村万作、地方六郷新之丞社
中)を演奏し共に好評盛会であった。尚六月
八日奈良薬師寺写経道場にて奉納演奏が決定
している。

ー(予　告)ー

○…京都琵琶協会五月定例茶話会　五月三日
(祝)午後一時会員梅原旭濤女史宅(向日市西
西向日町、電話九二二ー四五一二番)
○…浅野晴風独演会　五月八日(火)夕六時
東京新宿駅西口安田生命ホール、六十八才
記念リサイタル。門琵琶ー会員合奏　掛合
敦盛ー若林晴凌　山下晴楓、望月啞江　晴
風演奏(前席)濤陽江、(中席)安寿と厨
子王、(後席)設楽ケ原。(入場料千円)

○…中島真水、小林旭光、大滝旭雄三物故会
員追悼演奏会　五月十三日(日)正午京都
東山安井金比羅宮会館、主催京都琵琶協会
○…若宮旭登会演奏会　五月二十日(日)
十一時半、東京杉並区高円寺会館
○…薩摩琵琶四明会春季演奏会　五月二十七
日(日)昼京都東山安井金比羅宮会館　ゲ
スト出演静岡山本鶴声氏外二名
○…日本琵琶振興会五月例会　五月二十七日
(日)正午ー八時東京新宿洲鳳会館

あとがき

緑したたる快適の昨今絃友諸師お変りありませんか☆例年通り今年も春から初夏にかけて各地で演奏会等が盛んで我が世の春を謳歌されていることゝ思う☆筆者が住居する高槻市の中央を貫通する清流芥川の岸辺には桜、紅葉の古木が樹立し散策には打ってつけの環境だがその遙か上流に名勝摂津峡がある☆四月上旬のうらゝかな一日この仙境に杖を曳いたが一目千本の咲きも揃わず散りも初めぬ満山らんまんの桜花の間を縫って或は急に又緩に潔く流れる谷川の景観は文字通り筆にも絵にも尽し難く思わず快采を叫んだことである☆琵琶も勿論結構には違いないが偶には郊外の奇麗な空気を満喫して浩然の気を養って欲しい☆明治大正生まれの多い琵琶界の人々は特に健康に留意し長生きして琵琶を楽しんで下さい。

昭和四十八年五月一日発行（非売品）
編集者　植村　寛水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話（0726）八五ー六〇五一番

琵琶機関誌　京絃　第二二七号　京絃社

薩摩琵琶の真髄と今昔観(三)

歌舞伎と下座音楽の発生ー平和と頽廃

東京　坂本錦道

歌舞伎というものが日本に発生したのは足利の中期と云われ京阪地方より興って来た。その意味は「謡謡」または「好色」と解されると物の本に出ていた。それより稍おくれて三絃楽器が輸入され、歌舞伎の地方(ぢかた)としての下座音楽が研究されて、もろもろの邦楽が続々と発生し、所謂鳴物噺子と整態を整えて歌舞伎や舞踊と一体となり、こゝに綜合芸術となって庶民の中に迎え入れられ、男女入り乱れて歌舞されたものが抑も舞台芸術の第一歩で、安土桃山時代の信長、秀吉の勃興期で世に云う女歌舞伎である。

時代はそれより下って徳川家康が征夷大将軍となり、江戸に幕府を置く時は此の歌舞伎芸術は、全国の都邑を席捲するブームを呼んでいたのである。

この女歌舞伎はその芸を観ると云うよりは女役者が観衆に対して媚を売ると云ったもので、その淫風蕩々たる有様に、風紀を乱すものとして慶長十三年、時の為政者は断乎として弾圧を加え、一座の者は所払いや流刑に処せられている。

この弾圧によって一時しのぎに自粛することになったが、一度ブームを呼んだ流行は又しても元に復する有様であった。それから二十数年を経過して徳川家光の政令下に於て女歌舞伎は、女浄瑠璃一切を禁止すると云う処断が下され、茲にさしもの女歌舞伎も潰滅する仕儀に相成った。

ところが、今度はその女歌舞伎に代って抬頭して来たのが若衆歌舞伎と云った手合である。つまり女人の舞台勤めが御法度になったので、若衆が女役を勤めると云う「女形」という奇妙な役を開拓して登場して来た。演劇史上世界でも曾ってない一種の変態技芸が誕生した訳で、以来脈々として女形の俳優が今日に及んでいる。

若衆歌舞伎はとりも直さず男色である。陰間と称され徳川歴代の為政者がその取締りに苦心したもので、この男色は昭和の今日に於ても尚その跡を絶っていないのだから、変態の物好きはいつの世でも絶滅出来ないものである。

若衆歌舞伎はその後どうなったかと云えば、相も変らず風俗を乱すため一六五二年徳川家綱の治下遂に御法度の令が下ったが、これも東の間でその翌年に至って、又しても野郎歌舞伎というものが開演の請願が出た。今度は淳風美俗に重点を合せ、忠孝美談や人情もので演るという一札であるから、勿論許可が出たのである。

さて、それ以後の徳川治下に於ける世情というものは、全くの天下泰平で人心は弛緩頽廃、演劇の出し物は相変らず艶物という色事が多く、遊里が思いのまゝに殷盛を極め、廓文章なるものが我が物顔に登場し、歌舞伎と抱合せられた邦楽の各流も之に歩調を合せて発展し、良い悪いは別として代々幾多の名人が輩出されて来たというのが歌舞伎、舞踊や邦楽の史実に基いた歴史である。

天下泰平時には淫靡卑猥な文学、演劇、歌謡が出て来るのは昔も今も変りのない経路である。昭和元禄と云われる今日、自由の与え過ぎの結果として先づ若者の風俗思考は怪奇異様なものばかりで、男子は見るから不潔な長髪にどぎつい色彩の着衣、女子は断髪にバンタロンという格構で倒錯現象、歌謡の如きも昔のように情緒を湛え人の心線に迫るものは一つもなく、早口言葉に性的官能をヅバリと謡う下品なものばかり、その他の出版物、映画、どこを見てもこんな下らぬものが自由諸国の風潮だが、若し一党独裁の共産諸国にあったとしたら忽ちに流刑、銃殺は免れない。

平家の落人

平維盛

辻　旭城

紀州高野山は標高約九百米、老樹に覆われた山上の霊地である。西海の屋島で破れた平維盛一行は、生への執着から高野山へ―。その昔、女人禁制の厳しい掟は女人堂と苅萱、それに石童丸の哀史、それらは琵琶歌となって昭和の今日まで名残をとどめている。先きごろ紘友石橋旭嶺君とこの地を訪れた。樹齢数百年の森林に包まれた霊気は、今も尚訪れる人々の心の裡に、宇宙自然の誠と〃密教哲理の駿厳悠遠〃を思わせるものがある。

弥生になると空の模様が調って、霊峰山上山下の春色が漸く濃くなって来る。寿永三年（一一八二）三月十五日、この前後に高野山の林間に辛夷の花の咲く頃ほいである。

清浄心院谷の住房を出ようとしていた滝口入道は、谷のすぐ東の、目と鼻の先きに架かっている一ノ橋にふと目を注いだ。そこには落人らしい一群の武士達が、無気力に疲れ果てゝ佇んでいる。

滝口道心はふと胸騒ぎを覚えた。―去る二月、一の谷の戦に敗れた平家一門は、総大将宗盛以下が急坂を転げ落ちる霰の如く、かつて栄華を恣まゝにした都から一挙に追い落とされ、瀬戸西海の屋島に再挙を計っているということを風の便りに聞いたが、矢張り一の谷に次ぐ敗戦だったのだろうか？　滝口は一行に近づいてその風体に眼を注いだ。

道心は、遠い日の清盛館の花見の宴に「露に媚びたる花のお姿、風に嬲える舞の袖、地を照らし天も輝くばかり」と、桜花の小枝をかざしつゝ舞いたけた公達の面影が、そゞろによみがえって来た。いまその人は、潮風に黒み、つきせぬ思いにやせ衰えてそこに佇む。

「間違ったらお許し下されい、これは維盛卿におわさずや、私は時頼、斎藤時頼にござる。」と、あたりに気をくばりながら名乗ると、思わぬ邂逅に落人達の面上には一瞬喜びの色が溢れた。

屋島の海上生活は、都の華やかな暮しに馴れた公達にとって流刑に等しいものであった。妻子が思われた、甘美な酒や肴、明かるいともし火―こゝにはそれらの何一つ存在せぬ。花をかざして舞った日のことが、まるで昨日のように想い出される。それに引かえ屋島での日々は既に落人のたつきではないか。平家一門の命運も最早尽きようと云うのに、一体何の為の陣立てか、空しいことよ。あゝ都が恋しい、何れ亡び去る一門なら今の内に軍勢を捨てゝ京へ忍び帰ろう…。

維盛は屋島の陣中に在って、折に触れ事につけて鬱積するやり切れない思いを、つい口に出すこともあった。そのような維盛の言動から「源氏に心通わせて二心ありなん」と陰口されていることも従者から聞かされていた。

それから数日後に維盛は屋島の陣を捨てた。従者には阿波守宗親その他。一説には与三兵衛重景、石童丸および舎人武里が従ったとも云う。船兵と示し合せた一行は、暗夜を利用し船路を東にとって紀伊の港に着き陸路を京へと急いだが、既に都は敵の手中にあった。それにまた紀州路も源氏に味方する湯浅一族の詮議の目が厳しくなり始めていた。恩愛の絆に引かれゝば、そこには追捕の軍勢が待っている。今は生きのびることだけが残された一縷の願いであった。

唐より帰朝された弘法大師（空海）が、真言宗の大道場として高野山上に金剛峰寺を開かれ、その後数多くの伽藍、堂塔、僧房などが整備されて山上に一大聖地が出現した。

こうした霊地だけに高野山はあらゆる罪障を赦すという。又この山に入れば如何なる権力をもってしても、たとえ罪ある者でも縛につけることは出来ぬという。幸い紀伊の港からは一日の行程である。身も心も萎えしぼんでいたが、高野山を思うとき、そこには一縷の光明が影を投げかけて来るのであった。それにかねての平家の侍で今は山上の僧房に居る筈の滝口入道も心当ての一つであったので幾年振りの邂逅は主従達の此上ない喜こびであった。

維盛から源平合戦の一部始終を聞いた滝口は、「国内では果てしなき無常の風が吹きすさび、人生は荒野の中にあえぐ、人間が心から安心して立ち寄れる大樹、帰るべき家、道

ありと示す偉大な仏の教えがわが宗教即ち出家の道で、只この世に生きる幸福のためではなく、如何なる者も苛酷な人生の現実から逃れることは出来ぬ、逃れる道は仏道たゞ一つのみ。」ということを真心込めて説いた。

やがて滝口に導かれた維盛主従は、高僧として知られる東禅院理覚房心蓮上人に従って落飾した。維盛は法名を戒法房、阿波守宗親は心戒房。源平盛衰記によれば与三兵衛重景は法名を戒実、石童丸は戒円と号し、共に仏道に入ると書かれている。

高野山史は、翌四月十二日剃髪の導師心蓮上人の還化を「当代の碩徳、数多堂守を建立し仏像を造り、諸人を化益し、東密三十六流の一なる南院流の祖と仰がれたりしに云々…」と数行の文学を割いて惜しんでいる。だが、心蓮の死は維盛主従をかくまった責を、源氏或はその末流湯浅七郎兵衛あたりに問われた結果であったのかも知れない。

父祖忠盛、清盛の奉行した大塔を仰ぎ見ながら、平安な明け暮が維盛の上にめぐって来る筈であったが、やがて幾ばくもなく未だ二十七才という若い命は、無情の風に誘われて那智勝浦の海に入水して終るのである。

本稿を終るに当り、今一度高野の姿を偲び、忘れ去られた昔の哀史をじっくり味ってみるのも、決して無意義ではないと思う。京紘愛読の諸師に探勝をお勧めして筆をおく。

新作琵琶詩吟

「雪月花」

作詞　水藤五郎
作曲　水藤錦穣

（花）四季おりおりにうつりゆく、月雪花のその姿、眺むる人のゆかしくて、歌の心となりにけり、春や春、香りも妙に咲き匂ふ、霞が生める初ざくら、花の木蔭に舞う胡蝶、吹くそよ風に花の香を、送るその身に舞う吹雪。

詩　吟　（逸名）

薄命能く伸ぶ旬日の寿
納言の姓字此の花を冒す
零丁宿を借る平の忠度
吟詠風を怨む源の義家
滋賀の浦は荒れて暖雪翻り
奈良の都は古りて紅霞簇る
南朝の天子今何くにか在ます
芳山を望まんと欲すれば路更に険なり

見はるかす、滋賀の浦曲の春景色、都もはるか花の山、棚引く霞深くして、末だつゆ知らぬその奥に、雪かとまごう花吹雪、吉野の花は桜なり。

（月）詩　吟（上杉謙信）

霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併せ得たり能州の景
さもあらばあれ家郷遠征を憶ふ
月の光の冴へ渡り、虫の音すだく秋の野べ、そこにひと夜の手枕と、衣かり金忍ぶ草、とも寝の夜半の萩の葉の、露とも知らぬ旅の身が、雲居に渡す夢の橋、たえて久しき敷島の、道のゆく手は故郷の常盤の松の爪しらべ。

（雪）いつしか冬の声聞けば、めぐる其の夜に降りしきる、恵みの雪を踏みしだき、角田の夢を破りたる、剣撃の響、太鼓の音、「あれ大高源吾どの、うれしや〳〵」其角思わず声上げて「別れに一句いざ〳〵」と、問われて源吾声高く、「月雪の中や命のすてどころ」数多の敵を散らしつゝ、先を争う太刀風が、ふらす血汐の雪の花。

詩　吟（糸川丁汰）

義を結んで一死君恩に旬ず
浪々辛苦何ぞ論ずるに足らんや
仇敵の首級槍先に燦たり
堂々踏み出す雪晴れの門
花の東に睦み合う、心もゆかし人々の、清山流の春の宴、うたげの宴にこと添える、月雪花の、月雪花の琵琶の一節。

滝原流石

現に遠くけぶるは夢か花の雨
水際の藤たゆたう影は黙したり
惜春の心にとどむ幻影の蝶
藤植えて花を余生の夢に待つ

狂醉亭漫録（第九十）

赤穂義士の最期（五）

古谷竟水

元祿十六年二月四日、愈々切腹の時刻は迫る。被刑者一人毎に介錯人は任命されたが、其氏名は煩雑に付き便宜上省略する。

先づ細川家に於ては、此日越中守は早く此中邸に臨まれ、両検使とも会見し何くれと指揮されたが、朝来閣老から奉書の旨もあれば公然切腹の場には立会われず、次小書院中間の襖を立切り、小書院の中から内覧された。

既にして時刻を計り、検使荒木十右衛門、「大石内蔵助」と宣せられた。役者の間の口に詰居たる接伴係の御小姓吉弘嘉左衛門、八木市太夫は旨を承け、「大石内蔵助御出でなされ」と高らかに呼ばわった。「畏った」と応えて内蔵助其座を起ち廊下の方へ出でんとする。日頃彼と最も親密の潮田又之丞後ろから、「執れ追つけお後から」と声を掛ければ内蔵助は振返り、「お先に……」と只一言、莞爾と笑みて出でて行く。

御小姓の先導、介錯人の後従にて彼は静々として設けの席に就けば、小脇差を載せた三方は其前へと据えられた。後には藩中の物頭に其人ありと知られた勇士安場一平、介錯の太刀を執って廻り立つ。内蔵助は端然として検使の方へ一礼し、徐ろに双の肩衣を刎ね、肌押脱いで三方引寄せ、やをら小刀を腹へと擬した其刹那、「鋭」と一声、頭上に響けば呱世の烈士大石内蔵助良雄が英魂は髣髴として碧落に帰した。一平は直ちに其首を提げ、面を検使の方へ向け、其実検に供すれば実検の式は茲に了り介錯人は引退く。死骸は其儘蒲団に包み式場外に出して収棺する。畳は易えられ蒲団は改められる。同じ順序は繰返された。但だ首実検の式だけは、四家ともに最初の一人に止められた。

役者の間の入口にては、前の両御小姓の声として、「唯今内蔵助殿御切腹首尾好く相済みました。次は吉田忠左衛門御出でなされ」と呼ばわった。斯くて既に第三番に至り「唯今忠左衛門殿御切腹首尾好く……」と呼びかけた時、何処までも武士気質の堀内伝右衛門堪りかね、「一党の方々の御切腹に不首尾のあろう筈がおざらぬ。首尾好くだけはどうか御取り下されたい」と直言した。道理に打たれてそれから以後は単に「某殿御切腹相済みました」とのみ報ぜられた。斯くて十有七士の切腹の悉く了ったのは、酉の上刻前、彼是暮六つの鐘の入相告げるに近き頃であった。

この内蔵助等が切腹した細川邸は、明治の代に入り帝室の御有となり、高輪御殿と成った。その当時宮廷の官僚から、「御庭の内には大石内蔵助等が切腹致した跡も存しますれば、遺骸を送り出しました不浄門も残って居ります。それを如何致したもので御座いませうか」と伺われた。すると明治大帝の聖旨として、「其儘永く保存するように」との御沙汰であったと承る。義徒在天の霊にして知る事あらば碧落の内に感泣するであろう。細川越中守綱利の神霊も亦其志の空しからざりしを狂喜するであろう。甚しい哉、節義の以て人間に欠く可からざることや。

久松家に於ても、隠岐守自ら三田一丁目の中邸に入り、茲に臨まれた御目付杉田五左衛門、御使番駒木根長三郎の一行を出迎えて会釈せられ、準備は夫々整えられた。一党の切腹場は大書院前、臨検の一行から藩士の配置に至るまで大略細川家の通りであった。其の異同を言えば、本邸にては一党を長屋に置かれたので今日は駕籠にて呼取り、玄関から登って次の座敷に控えさせられた。而して切腹場の三面をば花色の幕にて囲み、二畳の畳の上に浅葱木綿の蒲団を敷かれた等が違って見えた。して隠岐守は奉書の前に対し、是も別座から内覧せられ、一門の方々も内々此中に見えた。恐らく他家でも同様であったろう。

未の刻即ち午後二時過に検使臨場せられてから間も無かった。義徒一同を大書院に呼出して、検使杉田五左衛門は御処分の御沙汰書を宣告された。大石主税、堀部安兵衛は一党を代表し、「私共一同本意を相達しましたる上に、切腹仰付けられまする事誠に有難く存じ奉りまする」とお受けをすれば、両検使は言葉を和らげ、是又自分等の一存と称し申聞けられる所あって、「寛々支度致されよ」と温言を加えられた。一党は退席して元の溜に入る。此処でも茶等を喫し、何れも談笑常の如く、手拭鼻紙等を取出し、顔から襟の辺を拭い心用意して待掛けた。

此間に一の訛伝が舞込んだ。それは平田黄軒と云う儒者が邸に帰り来り「一党は今日一旦切腹の座へまで直し、其座にて御赦免になるとの説頻りでござる」と告げた。「さては左様の事もござろうか、早まっては当家の不覚」と、延べられるだけ時間を引延べた。がそれも一党を殺したく無い輿情が産出した一時の風説に止まった。

既にして申の中刻即ち午後五時頃となった。検使はいざと促される。今は躊躇すべきで無い。「大石主税御出でなされ」の呼声は掛った。「畏まった」と起たんとする時、堀部安兵衛は其座から「拙者も只今……」と呼ばわった。主税顧みて顔見会せ、にっこり笑って立出づる。乃て主税は設けの場に上り、検使を望んで其座を正し、其方に一礼したる後御預以来厚意を寄せられ、今日自家の介錯として後背に臨める波賀清太夫を顧み乍ら、微笑を湛えて目礼し、形の如く三方引寄せ小刀を腹に擬する時、清太夫の手中の秋水大空を斬れば、十六歳の忠義の花は其太刀風に飛散った。清太夫は進んで弓手を伸ばし其髪を提げて前に向け、左の脚を折敷いて検使の実検に供えれば、斬られるも武士斬るも武士と、感称の色は式場に充ちた。実検は是にて終る。

附言＝此日隠岐守は一党を召して訣別の意を通じられ、殊に主税の死を惜み、遺言を聴取られたの説は、当時から流行して義人録に迄登されたが、実際は一の風説に過ぎぬ。

（以下次号）

我が道を行く六十五年（三）

西郷天風

この鳳鳴会支部（前の紘友会）に入門した私は、週二日の稽古日が待遠しくてたまらなかった。だから稽古日には必ず一時間前には出席して稽古部屋の掃除やら、座布団、茶道具等を整えて満留（みつとめ）先生の帰りを待つのが常だった。

先生は我が軍国時代の大工場で有名な小石川砲兵工廠の旋盤技師として忙がしい立場にあった。だから帰宅するのはいつも五時過ぎ時には六時を過ぎることもあった。

御家族は先生の母堂と、漸く一歳になったばかりの女の御子さんと三人暮しで奥様は死去されたらしかったが、ついぞそのお話は伺わなかった。一年ばかり経ってから後添えのやさしい奥様が現われ、私の仕事は楽になったものの相変らず一時間前には出席して、使い走りこそしなかったが、座敷や稽古部屋の整備は一切引受けていたのであった。

こうした私はいつも早く来て、先に来た者から順々に稽古をつける先生の側に座して、私も共に稽古して貰う気持で最后の人の済むまで座を離れず、全部の稽古が終ったところでゆっくり教えて頂くという状態だったから一日に幾人分かの異った曲を習っておることとなり、むづかしい筈の弾法も、第一弾法一と通り終了した頃は、二段法も三段法も先生と合奏する程に覚えてしまい、さすがの先生も驚いていた始末だった。

斯様な次第で先生の覚え芽出度い私は、時時御伴して紘友方の稽古場へ、道場破りなぞと申入れながら他流仕合に出かけ、私に自信を持たせようと試みられたものだった。

亦当時名人といわれた永井重輝先生の御宅へも度々お伴を命ぜられ、中々拝聴を許されない永井名人の弾奏に接する機会を与えて下さったのでした。

この永井重輝先生は、名人芸に接したい数多くの琵琶人が、詞を低うして訪ねて行けども殆ど玄関払いして、至芸の拝聴は許されぬと云うのが定説であった。その為め満留先生は一旦永井先生の御宅の前を通り過ぎて、三四軒先にあるたしか大阪商船だったように思うが、其の水先案内、つまりパイロットをしておられるお方にお願いして、永井先生の御宅へ連れて行って貰うのであった。そうしないと永井先生は逢うて下さらんかもしれんから、と平素ムッツリやの満留先生は、笑み乍ら洩した事があった。

其頃の私には、名人芸なるものゝ深さなど判ろう筈はなかったが、琵琶歴四十五六年を経た頃、つまり昭和二十九年私が鹿児島に遊んだ前后から、永井先生の芸の深さが判り初めた。それ程、私の耳に永井先生の至芸が奥深く焼付いていた訳である。

さて話が少々横にそれてしまったが、兎に角この鳳鳴会支部に入門して四ケ月目になった頃だった。初め四、五名だった門弟が毎月七、八名宛ふえて遂に三十名にも達し、先生一人ではとても手が廻らず、当然三段法まで会得した私が代稽古を引受けることゝなり、茲に初めて私も一人前の琵琶師として、鳳鳴会の先輩と共に木上武次郎先生出演の演奏会に露払の役をつとめる栄誉を得た訳であった。

其頃の鳳鳴会には、

中山鳳岳、大川鳳流、門田鳳月
小川鳳仙　神藤静児　満留鳳南

其他数名の達人が揃っていた。

こうした先輩と肩をならべて演奏する様になった私ではあったが、師範代として甚だひけ目を感ずるような事態に逢遇した、それは三年も前からこの稽古場に通っている古参の御弟子が現われたからであった。

この人は瓦斯会社の技師とのことであるが、時々眼疾の為め休む日が多く、今度も医療のため数ケ月病院で暮していたが、いづれは盲目になると云うので、その時の生活の糧にもと稽古に真剣である。私は此の御弟子に代稽古するのが何とも恐ろしい気がするのであった。

殊に心配なのは歌の方であった。絃の方は三段法まで修得しているが、歌の方はまだ数曲しか自信が持てなかった。しかし都合のよいことには、一応満留先生のもとで稽古を受け直ちに私の処へ来るのだから、唄う節廻しはたどたどしくてもどうやらやってのける。

そこで私は、そのたどたどしい節廻しを懇切に訂正補修してやり乍ら、私自身はまだ習わなかった歌の節付を覚えると云う寸法で、思えばまことに好都合だったのである。

筑前〝橘会〟全国大会

故一世宗家旭宗師追善演奏会より―

春とは名ばかりの弥生四日―。

筑前琵琶橘会初代宗家、故旭宗師七周忌追善を兼ねた全国大会が、東京日比谷の第一生命ホールに於て午前十時半より、しめやかな裡にも一種の熱気？　をはらんで開催された。

――このところ仕事に追われッ放しの寝不足を重い体を引きずって私が会場に着いた時は、〝全国大会〟と云う名とは裏はらに聴衆の入りは五、六分にも満たぬ閑散たる態で、いさゝかわびしい想いだった。

会場に面して広いロビーの左手の奥に、旭宗師の遺影を中心にさゝやかな祭壇が設けられ、左右二基の灯明が赤々と点されていて如何にも追善会にふさわしい。そして、遺影の前に一人、二人…と、何れは橘会関係の人々でもあろうか、静かに進み出て香をたき、頭を垂れてその冥福を祈る参拝者の敬けんな姿に、誰もが等しく胸打たれたことであろう。

さて、会場に入った私が一番最初に聴いたのは、酒井旭華（絃）、唄＝野村旭稲、小島旭清たちによる「彰義隊」（註―本プロの刷り違いから「関ケ原」となっているが）である。これは先月、新宿の洲鳳会館に於ける日本琵琶振興会の例会席上にても聴いているが当日は〝全国大会〟とあって、絃の酒井師を始め野村、小島のお二人も力一杯の熱演で、聴いていても気持ちがよい。

次の「別れの盃」神戸安住旭康、「井伊大老」八幡堤旭晨、戸畑亀田旭洋、小倉大山旭勝。「鶴ケ岡」の東大阪佐伯旭瑛は先づ無難であったが、演奏中極度の緊張の所為か、ちょっとトチル方もあったのは些か残念…。

これに反して「大徳寺」の名古屋志水旭城及び「関ケ原」の井坂旭良（絃）、唄＝佐藤旭天紅、花方旭路（何れも東京）は、唄、絃共に十分気合が入っていて、さしづめ当日の一番手柄であろう。

更に続いて小倉小野旭枝さんの「曲垣平九郎」、「羅生門」の彦根林田旭城さん、「大楠公」の東大阪渡島旭鶯さん…と何れも素晴らしい。

――こゝで、橘会現宗家の挨拶があり、功労者表彰として山崎旭華、山元旭錦、松本旭柳、堀田旭甲の四師に対してそれぞれ表彰状と記念品が贈られ、続いて芸の友社の鈴木誉士氏が来賓を代表して祝辞を述べ、これより第二部に移る。

× ×

何処の会でもそうだが、気にしていた聴衆の入りも午後になると尻上りに突ッ掛けてき

て、まづは八分の入りとて他人ごとながらやれやれ…でホッとする。そして、あの顔、この顔…と、日頃お馴染みの知人の姿も多く楽屋、ロビーでの一服に談笑の花が咲くのもまた一ツの愉しみである。

ところで、第二部に入ってから――。

一番手の「舟弁慶」唄＝樋口旭秀、堀川旭鵬、絃＝林田旭城（何れも彦根）を始め、東京金子旭昭、水戸城戸旭濤の「衣川」、名古屋の老錬石河旭豊穣の「平野国臣」、神奈川押川旭葉師の「川中島」は、例によって玉の汗を流しつゝの熱演とて、何時も好感が持たれる以為である。その他東京山田旭芳の「大楠公」、大阪山崎旭萃の「都落ち」。そしてお止めの「茨木」を演奏された広島板谷旭邑師のそれらは、まさに貫録充分、まこと、師範の名に価する立派なものである。

尚また、故旭宗師の「追憶譜」に於ける京都矢吹旭美津さんを始め唄九名、絃十名の山崎旭萃師まで、何れも揃いの黒の着付けに赤青、紫…と色彩りも鮮やかな水干？　衣裳も美しく、緋毛せん敷いたる置床に二段に分れての大演奏は、去る三日のひな祭りの三人官女、五人囃子もかくやと想われる程の華やかさで、まこと筑前ならではの白眉であり、見ているだけでも実に心愉しい。

そして当日の出演者全員が力一杯の演奏をし、多数の聴衆を迎えて文字通り〝全国大会〟の名に相応しい盛会で、泉下に眠る故旭宗師もさぞかし心より欣こばれたことであろう。

最後に蛇足ながら苦言を一ツ―。

当日のプロ（番組）が、出演者の順序不同もさることながら、曲目から出演者まで間違えると云うミスはどうしたことか？　小唄の会などではこうした番組の不同はザラにあることだが、琵琶の会に限ってはこのようなミスは断然改めて貰いたい。

また、会場の最前列に近く、タバコを吸っている馬鹿モンが居り、大会事務局の関係者に再三注意をかん起したが、一向に当人はやめる様子もなく、実に不快であった。こういう場所がらもわきまえぬ、物を知らざる〝浅黄裏〟には琵琶を聴く資格は更になく、さッさと叩き出してもらいたい。折角の〝全国大会〟に一の汚点を着けるようなものではあるまいか。（弥生九日夜・胡遊子記）

橘に　ゆかりの会や　弥生月

「琵琶愛好会」「琵琶を楽しむ集い」（いづれも仮称）　昨年六月謹一、番匠渚水、小塩梁水、田中歉水氏らの諸氏が発起し毎月第三日曜日午後大阪労働会館や寺院又は琵琶人宅等に同好の士が琵琶の外時には詩吟や各種邦楽等も楽しむという極めて気楽な会で会規もなく会費も不要。出欠も自由で何等拘束されることなく皆で半日を楽しむ集りで既に八回開催してやがて一周年を迎えんとしている。御希望の方は左記へ連絡されるとよい。（神戸市東灘区御影中町一ノ十四ノ十五田中歉水氏）

名韻会に琵琶出演　十七日正午東京東横劇場に於て開催され長唄、箏曲、小唄、哥沢、新内、義太夫、荻江、常盤津、清元等十六番が公開されたが琵琶は正絃会の軽部岳瑞氏が「知已」を演奏して大向うを唸らせた。

京都琵琶協会三月定例茶話会　三月十七日（土）午後会員矢吹華水女史宅で開催、去る十一日京都山一ホールでの三美会主催各派女流演奏会のテープ録音全部を再観賞したあと来る五月十三日の物故三会員追悼を兼ねた春季演奏会に出演の各自曲目選定、出演順の抽籤や予算編成等を協議し二、三会員の研究演奏があって夕食を共にし八時散会。出席者＝伊吹、戸田、若宮、田中、梅原、矢吹、牧、古谷、木村、水内、平井、植村。尚恒例の協会秋季大演奏会は九月二十三日（秋分の日）昼早々から京都府立文化芸術会館大ホールに於て開催することに決定した。

武絃会、一水会多摩支部合同研修会　三月十八日午後小金城山―富田晴萌、拾児―中島瀑水、吹雪の敵―佐藤皓水、鉢の木―石井效水、村上喜剣―伊藤磐水、舟弁慶―高杉洲靖、元冦―清水源城、本能寺―中村修水、時頼遍歴―大村鼓城、川中島―坂本錦道、以上順演六時閉会。尚次回は四月十五日同所に於て開催される。

琵琶研精会公演　三月二十四日午後二時東京日本橋第一証券ホールに於て創立二十五周年記念会公演、盛会であった。

青葉の笛―穂阿、穂嶺、穂仙・絃錦穂　綱館―旭陽、旭彰、旭鵬・絃旭鴻、小絃江風　扇の的―穂美、穂苑、穂芳・絃錦穂　桂―水藤五郎　龍の口―都錦穂　彰義隊―仲川秀邦　鉢の木―輝錦司　壇の浦―藤巻旭鴻　田村邸―京都矢吹華水、田中鵬水　舟弁慶―古田耕水　お市の方―水藤錦穣　大森彦七―吾妻八風（創立記念特別番組）司会―水藤五郎・三味線特出―春日とよ文喜外一　磯節―錦司　黒田節―秀邦　槍さび―耕水　山中節―錦穂　小唄二題―江風　柳の雨、傘の内―錦穣　都都逸―旭鴻